

厚生協会だより



震災復興に向けた全職員集会 (坂総合病院セミナー室 3月31日)

2011年4月21日
第 306 号

発行
(財)宮城厚生協会

〒985-0835
宮城県多賀城市下馬
二丁目13番7号
TEL 022-361-1113
FAX 022-361-1124
発行人:長澤清光

力を合わせて震災を乗り越え 新しい国づくりを



宮城厚生協会理事長 水戸部秀利

3月11日、東日本大震災で

たくさんの方の命が奪われまし
た。いまだ、瓦礫や冷たい海
の中で眠っておられる方もた
くさんおられます。生き残った
方々も家族や生活基盤を失
い、不自由な避難所生活を強
いられています。原発事故の
ため、避難を強制され、捜索
の手すら及んでいない地域も
あります。

私たち宮城厚生協会の職
員・友の会会員や家族にも、
犠牲者が出てしまいました。
家屋・資財を失った方々も少
なくありません。被災された
方々に心からお悔やみとお見
舞いを申し上げます。

「民医連はひとつ」

協会内の各事業所は、長町
病院付属クリニック以外は、
部分的な破損に止まり、懸命
の復旧作業で早期に診療を再
開することができました。余
震も頻発する中で通信、電気
や水や燃料、食糧の途絶とい
う危機的状況にあって、職員
が一致団結して患者や利用者
さんを守り抜いたことに敬意

を表します。

特に、坂病院は地域の「防
災拠点病院」として震災当日
から不夜城のように活動を続
けてきました。全日本民医連
は、直ちに全国支援を開始し、
全国からたくさん仲間が駆
けつけ、各事業所の診療支援
だけでなく、被災者の避難所
救援も展開し、その活動はマ
スコミにも紹介されています。
「民医連はひとつ」という思い
を改めて実感しました。

なお、長町病院付属クリニ
ックは倒壊の危険があり使用
不可になり、今後の再建が協
会にとって重い課題です。

日本のあり方を根本から

問いかける再生必要

これからは、震災直後の救
急救命中心の医療から、被災
者の生活を支え、劣悪な環境
での災害関連死や病状悪化や
廃用障害を防ぐ予防活動が重
要な課題になってきます。

今回の震災は、その規模と
深刻さからみて、5年10年単

位の、長い道のりの復興になります。復興・再生は、単に昔の状態に戻すことではないと思います。戦後60数年の日本の国のあり方、例えば、自己責任論や格差社会では被災者をさらにどん底に陥れま
す。医療や福祉の削減政策は膨大な医療難民・介護難民を生み出しています。原発依存のエネルギー政策の破綻はまさに進行形です。もしTPPが導入されていたら国内の食料は長期欠乏状態を引き起こし多数の餓死者を出していたかもしれません。このような日本のあり方を根本から問いつける再生が必要だと思いま
す。

阪神淡路大震災後の救済運動によって、ようやく災害時の個人補償制度ができましたが、まだまだ不十分です。緑豊かな田園、活気溢れる漁港、にぎやかな子供たちのはしゃぎ声、これらは社会にとって道路と同じように必須の公共財産です。その復活は私たち住民の権利であり、そのためには公的な資金を十分に投入

する必要があります。新しい日本を目指しながら、ともに困難を乗り越えましょう。
震災発生から1ヶ月となります。全国からの支援を受けながら、各事業所で献身的な医療活動が展開されています。

今回は震災発生時の対応および現状等について4病院の事務(局)長からの報告を紹介させていただきます。
(編集事務局)

【坂総合病院】

561名を救った

事務局長 福岡 真哉

全職員が
ひとつになって

地震発生後直ちに災害対策本部を立ち上げ、職員をトリアージブースに集中。「大規模災害マニュアル」に従い、救急車や緊急車両などで次々

と搬送されてくる被災者に整然と対応し各ブースに搬送。全職員がひとつになって治療を開始。

22日トリアージポストを終了させ、22時に玄関を閉じ、防災室からの出入りとなりました。12日間で、トリアージ黒(11)、赤(185)、黄(880)、緑(1296)、処方(本院823・クリニック1876)合計4446人。そのうち救急搬入は311件。

旺盛に避難所まわり
〈医療を待ち望む〉

全国各地から駆けつけてくれた仲間と避難所訪問を開始。13日は多賀城文化センターへ。二五〇〇人の避難者で溢れていました。熱が39度の子ども、血圧が180のお年寄り、薬を自宅に置いたまま避難し津波で家に帰れない人など、多くの方が医療を待ち望んでいました。避難所生活で眠れない人も多く、電気がなくほ乳瓶を消毒できず不安と訴えるお母さん、ストレスもあり胃薬が欲しいという人も。



次々と搬送されてくる被災者へ対応



支援者も含めた全職員ミーティング

〈多様な要求に沿った活動〉

24日以降は、医療活動だけでなく、避難所住民の多様な要求に沿った活動として足浴チーム、体操チーム、子どもたちの遊び相手等もして大変喜ばれました。ある避難所では生後2ヶ月の子の沐浴もできました。

新たな生命が

震災の日、産科病棟では新たな生命が誕生。23時44分、塩釜市舟入のA子さんとB男さんの第3子、Mくん。体重3422g。母親は、「こんなに大きな地震で命があってもよかった。いろんな人に助けてもらった命。大きくなった。この日のことを教えてあげたい。」と語っていました。

友の会会員さんまわり

友の会では、22日から会員訪問を開始。被害の大きかった地域、高齢者を中心に安否確認のほか支援物資などを配布してまわりました。みなさん復興に向けて後片付けに励

んでいました。ただ、商店に何時間も並び僅かな食料を確保しながらの作業なので、水や食料、ホッカイロなどの支援物資は大変喜ばれました。

「全職員集会」開催

31日、「震災復興に向けての全職員集会」を開催。1分間の黙祷後、「震災後の救急医療活動」を郷古先生(救急部長)が報告。各職場からの発言や炊き出し・避難所チームからの報告では、職員の連帯感、全国からの支援への感謝など、全日本が温かく繋がってきた活動だったことがどの職場からも強調されました。また、「メンタルケア」について、千葉先生(精神科)が震災の影響による心や体の変化への対応アドバイスを。震災への想いを綴った詩『命に向き合う』を作詩者の今野恵子さん(検査室)が読み、参加者への大きな共感と励ましとなりました。

最後に、「全国の皆さん支援ありがとう」の横断幕の前に集合写真を撮り、今後の活動を確しあいました。

〔長町病院〕

災害時緊急病棟を

立上げ地域での役割を發揮

事務長 大山 泰人

大丈夫！団結している！

■ 第一ラウンド

(3月11日～13日)

建物損壊、ライフライン全滅、システム中枢がダウンし壊滅的被害の附属クリニック、損傷激しいが自家発電稼働の病院、激震被害は想像を絶する。

病院1階フロアへ4階病棟患者全員避難。患者・利用者の避難と送り、地域住民の避難(長町小学校は2千人超)、在宅酸素患者の避難で自家発電の電源にフロアはあふれた。直後から、怪我、津波にもまれた急患が相次いだ。

対策本部を立上げ、最初の仕事は医師も一緒に職員全員が手渡しで入院給食の配膳。大丈夫！団結している！

幸いに医師、職員体制はある。11日から長町小避難所へ医療班常駐、10時間限界の自家発電を稼働継続(事務が昼

地域連携の模索始まる

■第二ラウンド

夜補給を続けた)、診療上で電子カルテは必須、自力でサバ救出決断し移設実行。13日に支援者第一陣到着。20時電気復旧し明日からの医療活動に光が差し込んだ。



職員全員が手渡しで入院給食の配膳

(3月14日~21日)
1日平均50名だった病院外来へ400名が殺到。生理検査室受付、内視鏡室受付、相談室面談室を急遽診察室に改装。全日本民医連藤末会長が激励訪問し阪神淡路大震災時の経験や教訓を伝授してくれた。非常時災害時における中小病院の役割が定まった。

水尻院長、佐藤副院長などが、行政、医師会、坂病院、東北厚生年金病院などと断続的に懇談。地域で急性機能を維持しながらベッド確保する連携の模索が始まった。また東北大病院や仙台市立病院も地域連携で機能維持へ奮闘した。
17日に5階リハ室フロアに急造で災害時避難病棟20床が完成。急性期病院からの受け入れを開始。17日17名、18日15名の新入院を受け入れた。最大時26床のオーバー。
震災発生から1週間経過し疲労ピークでの新たな取り組み、困惑もあったが自らの使命に支援者の援助も受け全員で乗り切った(3月28日解消)。

「普段の医療体制が災害時の地域支援のやり方にも反映」

■第三ラウンド

(3月22日~31日)

11日~19日まで長町小避難所24時間常駐、19日以降その他避難所巡回、若林地域訪問。22日以降、長町地域、友の会患者宅、ほっと亭利用者、若

林地域の戸別訪問へ段階的に切替、31日現在、訪問参加282名、安否確認1022名、地域訪問724件、避難所訪問16カ所。

■困難な中で職員が不眠不休の奮闘で医療活動を機能させた。支援者や関連業者等の協力に支えられたこともありがたかった。

何をどうしたらいいのか迷う時間さえ与えられない状況の中で、ひとつひとつの判断や決断の評価はもう少し時間が必要だろう。

支援入りした神戸協同病院院長の震災レポートには、「長町病院は、…普段の医療体制が災害時の地域支援のやり方にも反映されている。興味深かった。」と紹介されていた。



壊滅的被害のクリニック

【古川民主病院】

職員のエネルギを信じ、
いつか振り返られる日を
待ち望む

事務長 平賀 秀法

数日前の地震で入院患者に落下するような物が側に無かった事が幸いし怪我人はいなかった。

地震発生直後に対策本部を立ち上げ、患者と職員の安全確認と後片づけが手際よく行われた。徐々に被災者が病院

に避難してきた。翌朝全体集

会を開催。被災者の診療や避難所への医療班派遣、患者や友の会会員の安全確認が精力的に行われた。直接診療に関

わらない職員はグループ分けし復旧作業を分担。各フロア・部屋の後片付け、病室や床の掃除、食事介助、おむつ交換など多くの職員が率先して動いた。

つばさ薬局やあゆみ訪問看護ステーションの職員も加わり全体集会を毎朝開き意思統一を図った。民医連職員が一

つとなって動いた。

岩出山の湧水を汲みに走る

本体建物の損傷は無いが周辺地盤沈下が甚大。排水管が断裂したのかトイレの水が流れない。市内の給水場や岩出山の湧水を汲みに走った。三日目に水道の濁りが改善されたが受水槽からは強い塩素臭があり煮沸し飲用可とした。

電気は自家発電が稼働。重油のサービスタンクの残油量から24時間で底をつくと判明。



病院玄関前は深さ1m以上の亀裂が

第1種電気工事士の資格を持つT職員が精査し非常発電回路に改造。これで6時間おきに発電機に重油を入れる事が可能となり、この地域で唯一

病院だけが明りを灯し続けた。電気保安協会に交渉を行い3月15日早朝に通電となった。

電子カルテの稼働が求められた。主要パソコンを非常発電コンセントにつなぎかえ、13日には外来診察系と診療サービスク内の電子カルテ端末が全て稼働。

まさに民医連新綱領を
実践し体験

酸素は使用患者が3名のみ

と少なかったが、在宅酸素療法患者から次々と問い合わせが。停電で在宅器械が停止し携帯ポンペを抱えた患者が次々に処置室に運び込まれた。患者の動作制限と流量の引下げを各患者にお願いし14日に補充されるまでこの状態が続いた。

燃料ガスは幸いにプロパンガスで1週間は大丈夫。患者食の過熱、職員を含めた被災者への炊き出しが初日より始まった。沢山の職員から食料が提供された。大崎市は米どころ。野菜も米も直ぐ集まった。停電により各家庭の冷蔵庫から程良く解凍された食料も。ヨークベニマルの冷凍



修復されました。(4月3日)

庫も使用不能となり無償で多くの提供を受けた。最大で昼食120食、朝夕は40食ほどが用意された。炊き出しは19日まで継続し多くの職員を元気づけた。

3月22日から通常診療となった。今まさに民医連新綱領で学んだことを実践し体験している。復興には多くの時間と労力が求められる。職員のエネルギーを信じ、いつか振り返る事ができる日を待ち望みたい。

【泉病院】

多くの方々に支え

られての再開を実感

事務長 前谷津温子

ライフライン

全滅の対応

3月11日地震発生直後、入院患者は全員隣の公園に避難。雪が降り寒く余震が続き、動ける患者は近くの集会所に。移動困難患者は病棟に入りできるだけ出口付近に待機。2階東病棟新館と1階玄

関付近は広範囲で天井から水漏れ、2階病棟はEVホールまであふれた。正面玄関の自動ドアが開かなくなり、隣の診察室ドアから残っていた外来患者は帰宅、通所リハの利用者も全員帰宅できた。

外来待合室に職員が集まり現状報告。幸い怪我人はなくほっとしたが、東病棟は新館4病室と浴室、特殊浴室が使用不能となり他の病室を6床にして吸収。EVは停止、1階のほとんどの吸気ダクトが落下寸前、リハ室では天井が落ち本館のつなぎ目がゆがんでいる。

泉病院は山沿いに近く壊滅

的な被害は免れた地域だが、ライフラインは全滅、貯水タンクの残りを考えて飲用以外は使えない、発電機はあと16時間の燃料しかない。

外来には外傷で数人来院、縫合処置などを行い、夜間は7人の患者が来院。在宅レスピ、在宅酸素の方をバッテリーが切れる前に病院に連れてくる必要があり、ワゴン車を借りてなんとか搬送。西病棟に空いているベッドを運び、他医療機関や避難所からの要請に応える。在宅・介護では利用者、友の会も1人暮らしの方の安否確認が始まり、翌日も行なった。夕食時には職



リハ室のはがれた天井

員が集まり病棟までお盆を「リレー配膳」し1日3回19日EV復旧まで続いた。当日は夜勤以外にも職員や帰れなくなった職員20数人がそのまま泊まりこみ、不測の事態に備えた。

力合わせ乗り切る気持ち

伝わり心強い

2日目には給水車が来てくれたが自家発電機があと数時間。診サ課スタッフが軽油を求めて走り回った。医局は研修医2名を坂へ派遣し勤務組みなおし。朝夕に全職員が集合しミーティング。不安も大きい、力を合わせ乗り切っていくという気持ちで伝わり心強い。薬局やステーションからも参加、形を変えながら3週間続き、職員ニュースを毎日発行して細かな連絡を行なった。

電気復旧、患者さんも

一緒に拍手

14日からかかりつけ患者の外来診療開始。津波被災者や避難所から薬が無いなどで受

診。電気が復旧し外来にいた患者さんも一緒に拍手。16日緊急車両証明書発行を区役所に要請し病院車のガソリン確保。さらに、職員家族が新潟まで行きガソリン調達。職員の生活も支援し合い22日から外来通常診療、28日通所リハ再開、4月4日一丁目クリニックも再開。1病棟で通常より4〜5床患者の多い日が続き、看護師支援がとてもありがたい。友の会会員、ボランティアの援助・協力をいただき、地域の方々に支えられての再開だと実感している。



地震発生翌日の病棟ダイルーム